

氏名	富澤 公子		
学位の種類	博士(経営学)		
学位記番号	乙第4号		
学位授与年月日	2019年9月17日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当(論文博士)		
学位論文題目	奄美のシマ(集落)にみる文化資本を活かした地域経営 —長寿と人間発達を支える伝統と協働のダイナミズム—		
論文審査委員	委員	教授	古池 嘉和
	委員	教授	十名 直喜
	委員	教授	木船 久雄
	委員	教授	阿部 太郎

## 1. 論文の概要と位置づけ (論文の意義と独自性)

本論文は、長寿・超高齢社会が加速度的に進行する中で、加齢を衰えや衰退とみる「福祉的」でネガティブな老年学に対峙し、地域共同体を基盤とする人と人のつながりのなかでの幸せな老いを考究するポジティブな長寿・超高齢社会論を展開するものである。

ここで提示されたコミュニティ・マネジメントのあり方は、今後、より一層進展する高齢化時代に向け、日本が諸外国に先駆けて構築しなければならない、長寿が社会全体にとっての便益になるモデルへの貴重な提案であり、その点において本論考の意義は大変、大きなものがある。

本論文の独自性は、次の2点に集約できる。

1 つは、加齢(老い)に光を当て、個々人の潜在能力を開花させ、自律する超高齢者の人間発達に焦点を当てていること、2 つには、それらを引き出す奄美のシマ(集落)に注目し、そこでの長寿を実現している地域経営の仕組みの解明を行っていることである。

その実証のため、豊富な現地調査(インタビュー調査、アンケート調査、フィールド調査)を行い、その結果得られた調査データを、老年学や心理学、社会学、文化経済学など学際的な視点を加味して分析し、各分野の理論的成果をふまえた独自の理論を構築している点は、これまでにない老年学として評価される。

## (論文の構成)

序章 長寿・超高齢社会における人間発達と地域コミュニティ・アプローチ

第1部 超高齢期の人間発達と地域コミュニティ

第1章 超高齢期の機能と適応

第2章 超高齢期の人間発達：老年的超越理論

第3章 奄美にみる長寿の地域経営と社会経済システム

第2部 奄美群島の歴史・文化とシマ（集落）のコミュニティ

第4章 奄美の歴史と人々のおおらかさ

第5章 シマの豊かな伝統文化と超高齢者

第6章 長寿を支えるシマの現代版結いのかたち

第3部 超高齢者の老いと文化

第7章 奄美・超高齢者の老いと「老年的超越」

第8章 超高齢者の語りにみる幸福な老いと老年的超越の階層モデル

第9章 奄美・与論島における看取りの文化

終章 地域コミュニティにおける健康長寿と幸福な老いの課題と展望

(以上、219頁)

## (各章の概要)

序章では、長寿・超高齢社会における人間発達と地域コミュニティ・アプローチとして、本研究の中心となる研究課題を明らかにし、本研究全体を通観している。

第I部は、理論研究であり、第1章～第3章で構成されている。

第1章は、超高齢者観の理論的根拠、超高齢者に対する人間理解の枠組みを明確にしており、超高齢者が前期・後期高齢者と異なる心理適応があることが明らかにされた。第2章は、「老年的超越」理論を用いて、超高齢者が有するポジティブな心性を整理し、それを通じた考察により、奄美の超高齢者の幸福感を紐解く理論的な基礎を提示している。第3章は、奄美の集落（以下、シマ）の伝統的共同体の今日的意義と役割を考察しており、グローバル化が加速する近代社会において、再評価すべき要素（祭りや慣習等）を抽出している。本章における、時代の潮流や制度、枠組みの整理は、第II部以降の分析の基礎となっている。

第II部は、第I部の理論を元に、地域共同体というプラットフォームを基礎とした好循環が起きていることを実証的に検証したものであり、第4章から第6章で構成されている。第4章では、奄美には、健康長寿の形成要因として、自然との共生があることを示している。続く、第5章では、超高齢者は、共同体内部での伝統的な役割を有し、それらの期待が、長寿を目指すエネルギーになっていることを示している。第6章では、シマでの暮ら

しが伝統行事や信仰が中心の暮らしと超高齢者の自立が相乗効果となって共同体と個(人)の良好なバランスが保持され、それを年金や行政の支援制度がサポートする形で成り立っていることを示しており、その中で、豊富な人生経験から得られた叡智や修得された技などの文化資本と経済資本が分配される循環の仕組みを明らかにしている。

第Ⅲ部は、第7章から第9章までの3章構成であり、インタビューとアンケートを元に、老いと文化をテーマとした分析を行っている。まず、第7章では、高齢者との比較から超高齢者の地域への愛着度や、生活満足感等が高いことが明らかになっているが、キーワードとなっている「老年的超越」の下位次元を構成する「執着の超越」など3つの「超越」概念を導出している。続く、第8章では、老年的超越を形成する構造が三層になっていることを示している。それらは、基盤となる「人格形成基盤」、「(百歳を目指した)日々の営み」、「精神世界の次元」である。さらに、第9章では、与論島における在宅死と看取りのあり方について、明らかにした。同島では、自宅で看取る割合が8割を超える(全国的には病院死が8割)が、それを支えるのは住宅環境や家制度とともに、固有の信仰(与論神道)の影響が強いことが分かった。最後に、総括となる終章では、奄美のシマにおける健康長寿と幸福な老いの課題と展望についての考察を加えている。

## 2. 本論文の成果

本論文は、長寿社会における超高齢者の長寿と人間発達論であるとともに、それを可能にする長寿社会のコミュニティ論である。それと同時に、長寿・超高齢社会における地域固有の文化資本を活かした地域のあり方を問い直す地域経営論でもある。

これまでの超高齢者を取り巻く通説では、超高齢者を身体機能の衰退や要介護や認知症リスクの高まりとしてネガティブにとらえる傾向にあり、超高齢者の存在や潜在能力が資本としてポジティブに評価されることは稀である。そのためこれまでの長寿研究では、一部、地域医療・健康分野を除き、地域特性を長寿要因とする研究は見られないのである。

こうした中で、本論文での視点は、先行する研究も見られない中で、未踏の分野に果敢に挑戦したものであり、論者が十数年をかけて丹念に行った、多面的な接近からの実証研究を基礎とした労作である。そして、長年に亘って積み重ねた定性的・定量的な実証データを、老年学や心理学、民俗学、(文化)経済学などの知見に基づいて分析・考察した上で、それを地域コミュニティのモデルとして集約化したのである。

そこから浮かび上がったことは、対象とした奄美のシマの超高齢者と、奄美固有の自然資源、祭りや信仰、相互扶助(結い)、習慣などの文化資源などコミュニティ特性との関連性であり、それらコミュニティの特性と個人の長寿や、生きがいの要因とが相互に関連していることである。以下、改めて、明らかにされた成果について詳述する。

## 1) 健康長寿の経済システム構造：経済資本と文化資本の再分配機能を解説

生産人口／非生産人口で切り分けるような近代の経済システムの思考回路では、超高齢者の存在意義を評価することは困難である。そして、超高齢者が社会にとっての負担感を感じるようでは、豊かな長寿社会とは言えない。本研究では、奄美のシマの長寿を決定しているシステムが、上記のように切り分ける経済システムの思考パターンではなく、経済資本に加えて文化資本の視点を設定することによって、文化と所得が世代間で再分配される仕組みが機能していることを突き止めたのである。そのことで、世代間の役割分担が地域内部で共有化され、高齢世代に対する敬意を生むとともに、期待される高齢世代の生きがいに繋がっていることが解明された。これを資本の相互作用の関係から見れば、文化資本の影響を受けることで地域の経済資本を刺激するとともに、多世代が学び合う環境の中で生まれる文化資本の継承は、次世代の文化創造を刺激する作用も齎すことが確認された。このように、伝統的共同体を形成している奄美のシマのコミュニティでは、個人の健康長寿につながるような地域共同体の仕組みが機能し、資本の関係では、主として現役世代のもつ経済資本と、超高齢者の蓄積した文化資本とが、地域内の再分配システムとして機能していることが明らかになったのである。

## 2) 奄美のシマの文化資本を活かした地域経営モデルを提示

上記で示した仕組みによって、奄美のシマでは、超高齢者を包摂しながら持続可能なコミュニティが形成されており、長寿と人間発達を支える地域共同体経営の仕組みが機能している。それは、文化資本が身体化した個々人のつながりや結びつき、すなわち社会関係資本の作用であることが示された。すなわち、地域での役割や信頼感、ネットワークなどの「つながり」意識が、超高齢者の存在意義や潜在能力を高め、精神的次元にも安寧をもたらす効用になることが明らかにされたのである。そして、地域とのつながりのなかで豊かに老いることが同時に、その老いが地域の中で生かされることとして、相互作用的に好循環することが再認識されたのである。例えば、地域での祭りの場面や年中・伝統行事において、超高齢者の経験値や潜在能力を活用することが有効である。こうして文化資本は、それらの人々の間の関係の中から生まれる社会関係資本とも連動して、モデル化されることが分かった。

従来、こうした伝統的共同体原理によるモデルは、その閉鎖性や排他性が問題視され、今日の社会における適用限界が指摘されることもある。その点、奄美のシマにおける「おおらかさ（＝寛容性）」は、強いネットワークや規範性を持ちつつも、開放性や柔軟性を併せ持つものとして理解され、こうした要素を加えたモデルは、現代において十分な適応可能性を持っている。

従って、地域において、超高齢者の役割や存在意義を明確にし、高度に身体化した文化資本を引き出すことで地域全体の創造性を高めるシマの地域マネジメントのあり方は、高齢化問題に対峙することを余儀なくされた日本社会に対するメッセージにもなるのである。

### 3) 奄美の長寿・多子化要因の解明

奄美の中で、市町村ごとの「百寿者率」と「合計特殊出生率」を比較すると、それらが強い相関関係にあることが分かる。奄美の中でも、特に、百寿者率と合計特殊出生率が共に高くなる要因は、長寿社会と子育てが同様のコミュニティの基盤で育まれていることが浮かび上がった。そのための地域要因としては、これまで述べてきたように、地域の固有価値を形成する自然資本、文化資本、社会関係資本、それぞれが豊かであることが必要となる。

それを基底的に支えているのは、シマの人々に身体化した与論神道に支えられた「死生観（暁の上で最後を迎える）」であるが、それは、シマの人々の間で共有された価値基準となり、地域の医療や家制度などの規範という形で支援要因になっていることが明らかにされた。

このように少子・高齢化の問題は、同じ暮らしの環境／基盤（プラットフォーム）の上での現象であり、生まれてから死ぬまでの間の各世代で構成される相互依存や信頼、ネットワークの関係が必要となり、それを生み出す仕組みとして、文化資本と経済資本の再分配が機能することが示されたのである。

### 3 残された課題

本研究から明らかにされたのは、奄美のシマ（集落）の超高齢者という限定された地域と対象者であった。そこで明らかにされた奄美の健康長寿モデルは、今後ますます進展する超高齢社会のあるべき地域経営の方向性を実証的に提示しているものと評価できる。そこから得られた多くの知見は、今後の日本社会に向けた重要な多くの示唆が投げかけているが、既に、個人化が加速し、コミュニティの紐帯の希薄化が顕著な都市部を含めた普遍的なモデルに向けては、積み残された課題もある（下記、詳述）。

- ① 健康長寿と出生率の向上に向けて、奄美の「長寿多子化」から引き出された要素を普遍化し、他地域における少子高齢化の解決につなげていくこと。
- ② 特に、先行して近代化が進む都市部での少子高齢化問題を、再帰的に乗り越えていく際に参照可能なモデルとして有益なものとなるような工夫が必要である。
- ③ そのためにも指標化をしていくことが重要あり、KPI（key Performance Indicator）の設定によって、普遍的なモデルとしていく必要がある。
- ④ 権利としての社会保障制度と、自律的な地域や個人のバランスが重要であり、安易な自己責任論と誤解されないような工夫が必要である。
- ⑤ 健康長寿を支援する地域経営として、文化資本が身体化した自律的な個人や団体の暗黙知を活かした地域マネジメントモデルのあり方を探求することを期待したい。

#### 4 結論

本論文は、人間発達の現場である奄美のシマ（集落）のコミュニティに焦点を当て、超高齢者を取り巻く人々、シマの生活空間や習慣など、人々の語りや行動を質的・量的統計処理も行いながら、従来の研究枠を越えて、長寿を実現している地域社会とそこに機能する諸要因を解明した労作である。

特に、超高齢者を非生産人口として軽視することなく、コミュニティの中で老いの能力を地域に還元する存在として捉え直し、その潜在能力に光を当て、各世代にまたがる共生システムの要をなす役割を評価している意義は大きい。

併せて、超高齢者の経験と知恵は、体化された文化資本として地域社会・経済・文化に寄与し、彼／彼女らの能動的な主体性は、地域の新たな文化や経済を切り拓く可能性をも示唆している。さらに、これらの論考は、綿密な実地調査を踏まえたものであり、その実証性は高く評価できる内容となっている。そして、それらの実証データは、文化資本を軸とした洗練された理論フレームに基づいて分析されているため、そこから得られた多くの知見は、現代社会が見失っている「文化資本の経営」の視点を浮き彫りにできたと考えられる。

上記のことから、斬新な理論と詳細な実証データを踏まえた本論文は、博士論文の水準を大きく凌駕しているとともに、その知見を現代社会に問いかける意義も大きい。

以上により、本論文は博士論文の本審査基準を十分に満たしていると評価する。

#### (付帯事項)

上記の研究上の課題とは別に、公刊に際しては、口頭審査の段階で指摘された事項を考慮して、執筆することが必要である。特に、価値観を断定的に語る場合は、客観的なデータに基づくことが必要であり、安易な決め付けは誤解を招き易いので、慎重に記述することを求めたい。

加えて、改めて言うまでもないが、各審査委員より個別に指摘があった指摘事項並びに誤植等については、十分な咀嚼・確認の上で最終的な提出を求めたい。